The Society for Economic Studies
The University of Kitakyushu
Working Paper Series No.2012-7
(accepted in February 1, 2012)

動作や行為の場所につく「で」と移動先や着点につく「に」の混同

岡田美穂・林田実（北九州市立大学）

要旨

日本語学習者は、動作や行為の場所につく格助詞「で」を用いるべきところに誤って「に」を用いることがある（例：「食堂にご飯を食べる」，「あの喫茶店にコーヒーを飲む」）。本研究では、このような「に」の誤りが、どのような「に」の用法との混同によるのかを探るため、中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者を対象とした格助詞選択テスト形式の調査を行った。その結果、上記の誤りは、動作や行為の場所につく「で」と移動先や着点につく「に」との混同により生じている可能性があることが分かった。また、「あの喫茶店」のように距離的に離れて遠いことを表わす「あの」等を伴う文の方が、「あの」等を伴わない文より、「に」を選んだ誤答率が高かったことから、「あの」等が「に」を選んだ誤答率を上げる何らかの原因となっていることが分かった。

キーワード：移動先・着点につく「に」，「あの」・「来年」，動作や行為の場所につく「で」

1. はじめに

日本語学習者は、場所につく格助詞の「に」と「で」を混同することが知られている。中級レベルの学習者に見られる誤りは、「うちにパーティーがある」のように「で」を用いるべきところに誤って「に」を選んだ誤りや、「部屋でテレビを置いたので、狭くなった」のように、「に」を用いるべきところに誤って「で」を選んだ誤りが報告されている。前者の誤りは、「いる/ある」、「入る」など特定の動詞と「に」を結び付け、「に」を多用する学習者が、「ある」を目当てに「に」を選んだためであり（蓮池 2004）、後者の誤りは、動詞の動作性を目当てに「で」を選ぶ学習者が、「置く」の動作性に引かれ、「で」を選んだためである（鈴木 1978）という。

では、下記の①、②の誤りはなぜ起こったのだろうか。①、②は中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者が書いた文で、「で」を用いるべきところに誤って「に」

が選ばれている。

① 食堂にごはんを食べます。 (学習者の作文より引用)

② あの喫茶店にコーヒーを飲みましょう。 (顧, 1983)

①、②の動詞は「飲む」、「食べる」であり、「いる/ある」や「入る」など特定の動詞ではないので、動詞を目当てに「に」を選んでいるとは考えにくい。また、「飲む」、「食べる」は動作性の動詞だが、「で」を選んでいないので、動作性を基準に選んでいるとも考えにくい。だが、「に」を選んだのは、何か理由があるはずである。

本研究では、この「理由」の解明にとりくんだ。具体的には、中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者を対象とした格助詞選択テスト形式の調査を行ない、その分析から、次のような結論を得た。すなわち、1)上記のような「で」を「に」とする誤りは、移動先をあらわす「に」を、誤って使用した結果であること、また、2)文中に 「あの喫茶店」のように距離的に離れて遠いことを表わす「あの」等が入っている文の方が、入っていない文よりも、上記誤用が多くなること、である。以下では、2節で先行研究をとりあげ、3 節で我々の仮説を示す。第 4 節では仮説に基づいた調査の内容について詳述している。第 5 節では調査結果を分析し先の結論を得る。第 6 節は、まとめと今後の課題についてあてた。

2. 先行研究との関連

2.1 初級レベルと中級レベルの「に」、「で」の習得の様子

日本語能力が初級レベルの学習者を対象とした格助詞習得の「に」、「で」に関する研究には、松田・斎藤 (1992)、久保田 (1994)、八木 (1996) などがある。

松田・斎藤 (1992) は、韓国語を母語とする学習者 2 人の作文や発話を 6 カ月間、縦断的に観察した結果、場所につく「に」、「で」の使用に関して誤選択が多いと報告している。場所を表す名詞句につく「で」の誤りは、場所という実質的意味のみに注目する方略がとられることで、誤って「で」を選んでしまうのだろうと考察している。

八木(1996)は、母語の異なる学習者 17 人が書いた作文を分析した結果、場所につく「に」、「で」間の誤選択があったと述べている。さらに、「明日北海道に行く」のような行き先、方向につく「に」、「田中さんにハンカチをあげた」のような動作や態度が向けられる先や相手につく「に」の正用率が高かったのに対し、存在の場所につく「に」の正用率が低かったことを報告している。

久保田 (1994) は、英語を母語とする学習者 2 人の作文や発話を観察した結果、存在の場所につく「に」と動作や行為の場所につく「で」間の混同があり、「で」を用いるべきところに誤って「に」を選ぶことを報告している。また、「カナダ (へ/に) 帰った」のような文型では、到達点・目的地につく「に」の誤りがなかったことを報告

している。但し、「プールへ泳ぎに行く」のような文型では、「へ」を選ぶべきところに誤って「で」を選んでいるため、正用率が低いと述べている。

日本語能力が中級レベルの学習者を対象とした格助詞習得の「に」、「で」に関する研究には、鈴木（1978）、増田（2001）、迫田（2001）、蓮池（2004, 2012）などがある。

鈴木（1978）は、東アジア出身の学習者が書いた作文を分析し、「1. はじめに」の冒頭に示したように、「に」を用いるべきところに誤って「で」を選んだのは、動詞の動作性に引かれたためだろうと考察している。「９時に中河原駅で集まりました」の誤り「で」については、「集まる」は空間的な移動を表す動詞だが、ふつうの動詞とみられ、「で」を選んだのだろうと考察しているが、はっきりした原因はつかめないと述べている。

迫田（2001）は、中国語を母語とする学習者と母語の異なる学習者を対象として格助詞穴埋めテストを行った結果、学習者は「に」と「で」の選択に迷った時に、「中、前」などの位置を表す名詞＋「に」、「建物、地名」などを表わす名詞＋「で」というユニットを形成して用いるストラテジーを使っており、このストラテジーを多用することで誤用を産み出す可能性があると述べている。

蓮池（2004）は、格助詞「に、で、を、と」から１つを選ぶというテストの結果から、中国語を母語とする学習者は、「1. はじめに」の冒頭に示したように、「に」の誤りは、「鈴木さんのうちにパーティーがある」、「入口に入ってすぐ右が、切符売り場だ」のように、「いる/ある」や「入る」など特定の動詞を「に」と結びつけ、「に」の過剰使用[1]を引き起こしたものであると考察している。特定の動詞を「に」と結びつけやすいのは、日本語学習者用の教材に「いる/ある」や「入る」などの動詞と共に「に」が強調して提示されているからであると推測している。

一方で、蓮池（2012）は、格助詞選択テストの結果、「～で本を読む」のような他動詞文の「で」は、81.3%の高い正答率だが、「～で遊ぶ」のような自動詞文は、誤って「に」を選びやすく、68.8%の低い正答率であったことから、学習者は、動詞が対象物をもつかどうかを手がかりに「で」を選んでいるのではないかと考察している。

以上の先行研究を総括すると、初級レベルの学習者は、「明日北海道に行く」のような行き先、方向につく「に」、「田中さんにハンカチをあげた」のような動作や態度が向けられる先や相手につく「に」は、ほぼ正しく用いることができるが、存在を表す場所につく「に」は、あまり正しく用いることができず、動作や行為の場所につく「で」との混同してしまうことが分かる。

中級レベルの学習者は、「いる/ある」や「入る」など特定の動詞と共に「に」を結びつけやすく、「に」の過剰使用による誤りがあること、動詞の動作性に着目して誤って「で」を選ぶことが分かる。これらのことから、中級レベルの学習者の①、②の「に」の誤りは、「いる/ある」や「入る」といった特定の動詞ではないため、「に」の過剰使

用による誤りではないこと、①、②が「で」を用いていないため、「食べる」「飲む」の動作性に着目して助詞を選んだのではないことが推測された。

2.2 「に」と「移動」

格助詞は単独で用いられることはない。国語学者、日本語学者による「に」、「で」の用法の分類はさまざまだが、助詞はすべて文において示されている。『日本語教育事典』によると、「に」は、「北海道に行く」などが行く先につく「に」で、「田中さんにハンカチをあげた」などが物の授受などを行う相手につく「に」というように分類されている。そして、行く先につく「に」は、移動動詞と共に用いられ、移動動詞には、主体が移動する場合と物を移動させる場合とがある（例：「大阪に行く」、「本をたなに載せる」）という。

「彼に手紙を送る」、「先生に答えを聞いた」などモノの授受を行う相手を表す場合もモノの移動がある。そのため、本研究では、この場合も、行く先につく「に」と共に用いる主体が移動する場合と物を移動させる場合と合わせて「移動」の動詞と呼んでいる。具体的には、以下に示した寺村（1999）[2]の動詞を「移動」の動詞と呼び、また、「移動」の動詞と共に用いる「に」を、移動先や着点につく「に」と呼んでいる。

〇移動―3「入ル、着ク；泊マル」類
　・述語：A．入ル, 乗ル, 届ク, 到着スル, 上ガル, 達スル, 至ル, 迫ル, 降リルなど
　　B．集マル, 集中スル, 近ヅク, 沈ム, 広マル, 広ガル, 落着ク, ハヤル
　　C．泊マル, 住ム, 下宿スル, 居候スル, 浮ク, 浮カブ, 立ツ, 座ルなど
　・補語：仕手（X）→Xガ　・到達点（Y）→Yニ
〇行ク、来ル、帰ル、戻ル
　・補語：仕手（X）→Xガ　・到達点（目的地）（Y）→Yへ/Yニ
〇貸ス、与エル、ヤル
　・XガYニZヲ～スル　（寺村, 1999）

新井（1972）は、場所につく「に」と「で」のちがいを日本語学習者に教えるという実践的な必要から、場所につく「で」が「に」とちがう点を示すことの必要性を説いている。場所につく「で」が「に」とちがう点の１つは、動詞の「場所を移す」という意味の「移動」という意義と結びつかないという点である。したがって、「で」と「に」とを区別する１つの目印は、「移動」の概念が入っているか否かということになる。

ところで、すべての動作・出来事の動詞は、「一般的な場所」と広く結びついてお

り、それゆえ、第 1 選択肢としては、「で」が考えられるわけであるが、その中から移動の意味を持つ動詞を選び出し、「特定化された場所」と結びつけることができた時に、はじめて、「に」を選択できることになる（寺村, 1999）。しかしながら、すべての動作・出来事の動詞の中から、移動の意味を持つ動詞を認識し、ただしく「に」とすることは、学習者にとって、必ずしも容易ではない。菅井（2000）[3]や森山（2005）[4]に示されているように、「に」と移動の動詞から成る文は、学習者にとって、「移動」が分かりにくい場合もある。

3. 仮説

日本語習得を目指す学習者は、「に」を習得しならなければならないことは論を待たない。そのためには、場所につく「に」と結びつく「移動」を意識することになる。「移動」を意識しすぎる学習者は、文全体から、目的・目標へ向かって人や物が移動するイメージを受けると、動作や行為の場所につく「で」を用いるべきところであっても、誤って「に」を用いてしまう可能性があるのではなかろうか。

また、「移動」を意識している学習者は、②のように、「あの」によって移動性の大きさが高まるような文では、動作や行為の場所に誤って「に」を選んでしまうのではないかと考えた。そうだとすれば、「来年」なども、現在の時から遠く離れた将来の時を表わすので、同様に、移動性が増大し、誤って「に」を選んでしまうかもしれない。

そこで、「食堂で食べる」の文に誤って「に」を選んだ学習者 10 人に、「に」を選んだ理由を尋ねたところ、10 人中 8 人が「食堂で食べる」と言えば、「ご飯を食べるために、『食堂に行く』から『に』を選ぶ」と回答した[5]。また、学習者は文全体から助詞を選んでいる。学習者自身の言語に関する発言は、必ずしも彼らの言語知識や言語処理を反映しているとは限らないが（Seliger&Shohamy,1989）、示唆を与えてくれる。さらに、「事務所で働く」の文について、文から受けるイメージを尋ねたところ、85 人中 49 人が「移動先（目的・目標へ向かって人や物が移動する感じ）」のイメージがあると回答した[6]。

「移動」は、動詞の表す重要な概念である。学習者は、日本語の習得を目指しているので、「に」の選択に必要な「移動」を意識していると思われる。そのため、「に」の習得過程にある学習者は、文全体から「移動」のイメージを受けると、移動を表さない動詞の文であっても、誤って「に」を選んでしまうと考える。

また、②の「に」は、「あの」が何か関係しているのではないかと考える。「あの」は距離的に離れていて遠いという意味を表す。「移動」を意識している学習者は、「あの」によって移動性の大きさが高まり、動作や行為の場所に誤って「に」を選んでしまうのではないだろうか。以上を仮説の形で表すと以下のように集約できる。

［仮説 1］動作や行為の場所につく「で」を用いるべきところに「に」を用いる誤りは、動作や行為の場所につく「で」と移動先や着点につく「に」との混同したものである。

［仮説 2］「あの食堂」のように「あの」等を伴う動作や行為を表す動詞の文のほうが、「あの」等を伴わない動作や行為を表す動詞の文よりも「に」の誤りが多い。

一般に、学習者は、自身が蓄積した中間言語[7]の規則の中から、当て推量にではなく、予測のつく規則を選び出す（Ellis,1985）と言われている。学習者の誤り（errors）は、目標言語（target language）の文法には合致しないが、規則的（systematic）である[8]という。上記のことがらは、Ellis の 1 つの現象と言えるかも知れない。

4. 調査

先に示した仮説を検証し、動作や行為の場所につく「で」の習得の様子を探るため、日本語レベルが「中級レベル」[9]の学習者を対象に、「に、で、を、から」の四択テスト形式の調査を行った。場所につく「を」、「から」を加えたのは、「に」、「で」の二者択一によるまぐれあたりをできるだけ排除するためである。

調査協力者は、福岡市の私立大学に在籍している学習者 88 人[10]である。調査は、2012 年 6 月末から 7 月にかけて、調査票 4 枚を 1 枚ずつ週に 1 度行った。4 枚を週に 1 度ずつ行ったのは、問題数が 198 問になることで学習者に負担がかかり、格助詞の選択がいい加減になってしまうのを避けるためである。調査票 4 枚を週に 1 枚ずつ実施したことによる「学習効果」については後に述べている。

学習者の負担を軽減するため、いずれも問題文中の「に、で、を、から」の中から正しいと思うものを〇で囲むという格助詞テスト形式である（例：「食堂（に、で、を、から）ご飯を食べる」）。問題文中の漢字にはすべてかなを振っている。問題文の番号は実際の調査票の番号とは一致しない。以下、原文を示す。まず、調査票 1、2、3 に共通している問題文である問(2)～問(4)を示し、次に、調査票 1 の問(1)、調査票 2 の問(1)’、調査票 3 の問(1)”、最後に、調査票 4 の問(2)’を示している。

4.1 調査票

・調査票 1、調査票 2、調査票 3 に共通する問題文問(2)問(3)問(4)の留意点

分析の対象となる問題文（調査票 1(1)、調査票 2(1)’、調査票 3(1)”）以外は同じ条件でなければならないため、調査票 1～3 問(1)～(3)は、すべて同じ問題文である。

問(2)　「移動先ニ」。正答は「に」: 12 問の内、6 問を示す。
（あなたは今、九産大の教室です）[11] のように、学習者が現在居る場所を示しているのは、「から」を正答としないためである。

1、田中さんにお土産をあげる。　　4、(あなたは今、九産大の教室です) 東京に行く。
2、弟に時計をやる。　　5、(同上　) 中国に帰る。
3、李さんに日本語を教える。　　6、(同上　) 中国に手紙を送る。

問(3)ダミー文。正答は「から」: 12 問の内、2 問を示す。

1、駅からここまで歩く。　　2、中国から荷物が来る。

問(4)ダミー文。正答は「を」: 12 問の内、2 問を示す。

1、橋を渡る。　　2、階段を下りる。

・調査票 1（全 50 問）作成の際の留意点

問(1)　「動作デ」文。正答は「で」: 12 問

（＊は分析の対象としない。「公園でゲームをして遊ぶ」という文の構造（「N で N をして V」）が、「事務所で仕事をする」など 1～6 の他動詞文の構造（「N で N を V」）と異なってしまったため、構文の違いによる正答率の違いが生じてしまう可能性を考慮し、分析の対象から外した）

動作や行為の場所につく「で」を伴う文で、他動詞の文と自動詞の文がある。他動詞の文と自動詞の文は、文の表す内容がほぼ同じになるようにした(他動詞文の例:「事務所で仕事をする」自動詞文の例 :「事務所で働く」)。すべての問題文を示す。

（他動詞文）	（自動詞文）
1、事務所で仕事をする。	7、事務所で働く。
2、教室で本を読む。	8、教室で読書する。
3、大学で日本語を学ぶ。	9、大学で勉強する。
4、レストランでご飯を食べる。	10、レストランで食事する。
5、部屋で服を洗う。	11、部屋で洗濯する。
6、銀行でお金を換える。	12、銀行で換金する。
＊ 公園でゲームをして遊ぶ。	＊　公園で遊ぶ。

・調査票 2（全 50 問）作成の際の留意点

問(1)’　「あの・来年」文。正答は「で」: 12 問

（＊「～遊ぶ」は、調査票 1 と同じ理由で、構文の違いによる正答率の違いが生じ

てしまう可能性を考慮し、分析対象としない）

調査票 1 問(1)の「動作デ」文に「あの」「来年」を伴うものを「あの・来年」文としている。「来年」は、増田（2001）が行った、英語を母語とする日本語学習者に対する助詞の穴埋めテストの問題文からヒントを得ている。テストには「来年はアメリカで勉強します」という問題文が含まれており、中級レベルの正答率が 64%であった。増田（2001）には、「来年」を伴う問題文が正答率を下げた原因であることについては述べられていないが、「あの」に加えて「来年」等も実験してみる価値はあると考えた。「あの・来年」を伴うことで「に」を選んだ誤答率が、「動作デ」文に「に」を選んだ誤答率よりも高くなるかどうかを知るためには、「あの・来年」の有無を除き、他の条件が同じでなければならないからである。

1、来年事務所で仕事をする。
2、あの教室で本を読む。
3、来年大学で日本語を学ぶ。
4、あのレストランでご飯を食べる。
5、あの部屋で服を洗う。
6、来年銀行でお金を換える。
7、来年事務所で働く。
8、あの教室で読書する。
9、来年大学で勉強する。
10、あのレストランで食事する。
11、あの部屋で洗濯する。
12、来年銀行で換金する。

・調査票 3（全 50 問）作成の際の留意点

問(1)”　「東京」文。

正答は「で」: 12 問の内、8 問を示す（＊「～遊ぶ」は分析対象とはしない）

この問題文も、調査票 2 問(1)’と同様で、調査票 1 問(1)の「動作デ」とまったく同じ問題文を使っている。調査票 1 問(1)の「動作デ」文に、「東京」「アメリカ」「向こう」「遠く」を伴うものを「東京」文とした。

1、東京の事務所で仕事をする。
2、向こうの教室で本を読む。
3、アメリカの大学で日本語を学ぶ。
4、遠くのレストランでご飯を食べる。
5、東京の事務所で働く。
6、向こうの教室で読書する。
7、アメリカの大学で勉強する。
8、遠くのレストランで食事する。

・調査票 4（全 48 問）[12] 作成の際の留意点

問(2)’「存在ニ」。正答は「に」: 12 問

この問題文は、人やモノの存在を表す文である。「ある」を述語とする問題文を 6 問とし、「いる」を述語とする問題文を 6 問としている。以下、問題文のすべてを示している。

1、机に荷物が置いてある。
2、冷凍庫にアイスクリームが入れてある。
3、テーブルに写真が飾ってある。
4、ベッドに子供がいる。
5、ソファーにねこがいる。
6、棚に漫画がある。
7、食堂に花が飾ってある。
8、駅に自転車が置いてある。
9、大学に車がとめてある。
10、寮に留学生がいる。
11、図書館に山田先生がいる。
12、会社におじ（さん）がいる。

5. 仮説の検証

仮説 1 および 2 を検証するために、以下のような方針で臨んだ。まず、仮説 1 については、動作や行為の場所につく「で」（以下、「動作デ」）と、移動先や着点につく「に」（以下、「移動先ニ」）との関連を調べた。もし、両者に関連がなければ、「移動先ニ」の正答率が上昇しても、「動作デ」を「に」と誤る誤答率とは相関がないであろう。逆に、何らかの関係があるなら、両者には相関がみられるはずである。

仮説 2 については、直接検証可能である。「あの食堂」のように「あの」等を伴う文において、「で」を「に」と誤る割合と「あの」等を伴わない文のそれとを比較して、割合の差が見られるか否かを検定すればよい。

まず、仮説 1 についての分析結果を示そう。動作や行為の場所につく「で」に誤って用いられている「に」が、移動先や着点につく「に」との混同によるものであれば、「動作デ」文[13]の「で」を用いるべきところに誤って「に」を選んだ誤答率（以下、「動作デ」文「に」誤答率）と「移動先ニ」正答率との間に逆相関が見られるはずである。表 1 には、「動作デ」文「に」誤答率と「移動先ニ」正答率との相関係数を掲げた。また、比較のために「動作デ」文「に」誤答率と「存在ニ」正答率との相関係数も載せてある。

表 1　「動作デ」文「に」誤答率と「移動先ニ」正答率の相関、「動作デ」文「に」誤答率」と「存在ニ」正答率の相関

	「動作デ」文「に」誤答率
「移動先ニ」正答率	−0.362**
「存在ニ」正答率	0.053

注：** $p<.01$.　　n=88.

表 1 の「移動先ニ」正答率とは、調査票 1〜3 問(2)の「移動先ニ」における各調査協力者の正答率（「に」正答数÷問題数 36）で、「存在ニ」正答率とは、調査票 4 問(2)’の「存在ニ」における各調査協力者の正答率（「に」正答数÷問題数 12）である。ま

た、「動作デ」文「に」誤答率とは、調査票 1 問(1)における各調査協力者の「に」誤答率（「で」を選ぶべきところに誤って「に」を選んだ誤答数÷問題数 12）である。「動作デ」文「に」誤答率と「移動先ニ」正答率との間の相関係数は、-0.362、p 値は 0.01 であり、1%の有意水準で有意であることが分かる。このことは、「移動先ニ」正答率が上昇すると、「動作デ」文「に」誤答率が下がることを意味している。すなわち、「移動先ニ」の習熟度が高くなると、「動作デ」を「に」とする誤りも減少し、正しく「で」を用いることができるようになるということである。

一方、「動作デ」文「に」誤答率と「存在ニ」正答率との間の相関は有意ではなかった。すなわち、「存在ニ」に習熟しても、「動作デ」の誤答率には影響が見られない。以上の 2 つの事実をあわせて考慮すると、「動作デ」文において、「に」と誤る現象は、「移動先ニ」との混同に由来することが示唆される。この示唆を確かなものにするために、「動作デ」文に「あの」等を伴う文（以下、「動作デ＋あの・東京」文）における、「に」誤答率に目を向けよう。

表 2 は、「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率と「移動先ニ」正答率との相関、同じく、「存在ニ」正答率との相関を表したものである。ここで、「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率とは、調査票 2 問(1)’および調査票 3 問(1)”における、各調査協力者の「に」誤答率である。

表 2　「動作デ」文「に」誤答率と「移動先ニ」正答率の相関、「動作デ」文「に」誤答率と「存在ニ」正答率の相関

	「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率
「移動先ニ」正答率	-0.223**
「存在ニ」正答率	0.173

注：** *p<.01.*　　*n*=88.

「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率と「移動先ニ」正答率との間の相関係数は、-0.223、p 値は 0.01 であり、1%の有意水準で有意であることが分かる。これは、表 2 の結果と整合的である。また、「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率と「存在ニ」正答率との間の相関は有意ではなかった。これもまた、表 1 の傾向と完全に一致している。

以上の分析結果から、「動作デ」文、および、「動作デ＋あの・東京」文において、「で」を「に」と誤るのは、「移動先ニ」との混同が生起しているためであると結論しても良かろう。

次に仮説 2 についての分析結果を示す。表 3 に、「動作デ」文「に」誤答率と「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率の標本平均を示した。

表 3　「動作デ」文「に」誤答率と「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率

	「動作デ」文	「動作デ＋あの・東京」文
「に」誤答率	9.56	12.41

n=88

それによると、調査票 1 の問(1)「動作デ」文の「に」誤答率は、9.56%、調査票 2(1)’、調査票 3 問(1)”の「動作デ＋あの・東京」文の「に」誤答率は、12.41%であった。調査協力者の各々について、「動作デ」文「に」誤答率と「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率が観測されるので、両者の真の誤答率に差があるか無いかを調べるために、対応のある t 検定を行うことができる。その結果、10%の有意水準ながら、両者の真の誤答率に有意な差を見いだすことができた。すなわち、「動作デ＋あの・東京」文において、「に」と誤答する真の割合は、「動作デ」文のそれより大きいと言うことができる（t(-1.835), df=87, p＜.10）[14]。

表 1～3 の結果を統一的に見ると、次のようなシナリオが考えられる。「移動先ニ」正答率と「動作デ」の「に」誤答率との逆相関、同じく、「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率との逆相関は、「動作デ」を「に」とする誤りが「移動先ニ」との混同であることを強く示唆している。そこで、「動作デ」文「に」誤答率と「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率とを目的変数に、「移動先ニ」正答率を説明変数にして回帰分析を行った（表 4 参照）。

表 4　目的変数を「動作デ」文「に」誤答率、「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率に、説明変数を「移動先ニ」正答率にした回帰分析の結果

目的変数	説明変数	定数項	t値	傾き	t値	決定係数	標準誤差
「動作デ」文「に」誤答率	「移動先ニ」正答率	0.327	4.99	−0.299	−3.6	0.131	0.1228
「動作デ＋あの・東京」文「に」誤答率	「移動先ニ」正答率	0.278	3.74	−0.199	−2.12	0.049	0.139

n=88.

表 4 によれば、「移動先ニ」正答率にかかる係数はそれぞれ、-0.299 と-0.199 であることから、「移動先ニ」に習熟したとしても、「動作デ＋あの・東京」文の方が、「動作デ」文よりも、誤る割合の低下は緩やかである。これは、とりもなおさず、「動作デ＋あの・東京」文には、「動作デ」文よりも、正しい回答にたどり着き難くなる何かが存在していることを意味している。

学習者は、「食堂で食事する」や「あの食堂で食事する」という文において、なぜ、「で」を「に」と混同してしまうのであろうか。学習者は、初級レベルで「行く、帰る」等の移動が分かりやすい動詞と共に用いる「に」をほぼ正しく使うことができる。すなわち、「行く、帰る」には「に」を用い、「行く、帰る」は「移動」の動詞であることから、「行く、帰る」＝「に」＝「移動」のように頭に叩き込んでいる。

学習者は、日本語の習得を目指しているので、「に」が「で」と異なり、移動の動詞と共起するということから、「移動」を意識して用いようとする。「食堂でご飯を食

べる」と言えば、「食堂に行って」「食堂でご飯を食べる」ことなので、文全体に目をやると、「食堂に行く」という行為を伴うことがイメージされる。そのため、移動先や着点につく「に」を選んでしまうと考える。また、食堂に「あの」という形容がつくことによって、ますます、「移動」のイメージは強められる。「動作デ＋あの・東京」文には、「動作デ」文よりも、正しい回答にたどり着き難くなる何かがあると先述したが、この何かとは、このイメージを強調する機能をもった「語」と推測できないであろうか。

最後に、本論文の 4 つの調査票には、部分的に同一の問題文が採用されており、同一の調査協力者が時間を空けて、調査されている。したがって、そこに「学習効果」が発揮されて、結論をゆがめているのではないかという指摘がなされうる。結果から言うとそれは杞憂であった。調査票 2、調査票 3 の「に」「から」「を」の正答率は、調査票 1 の「に」「から」「を」の正答率より極端に高いものはない[15]。すなわち、本調査に関しては、学習効果はなかったと言ってよい。

仮に学習効果があったとしても、1 回目の調査の「動作デ」の「に」誤答率よりも、2 回目、3 回目の調査の「あの・来年」文と「東京」文の「に」誤答率の方が高いことを考えると、動詞文に「あの・来年」「東京」等が入ることによって、誤答率を上げる何らかの効果があったのではないかと言ってよい。

6. まとめと今後の課題

中国語を母語とする中級レベルの学習者が「食堂にご飯を食べる」のように、誤って「に」を選ぶのは、動作や行為の場所につく「で」と移動先につく「に」との混同により生じている可能性があることが分かった。学習者は、日本語の習得を目指しているので、「で」と「に」の異なる点としての「移動」を意識している。そのため、文全体から助詞を判断しようとする際に、「食堂への移動」に着目し、誤って「に」を選んでしまうのだろうと思われた。

また、「あの食堂」の「あの」等を伴う文が、「あの」等を伴わない文よりも「で」を選ぶべきところに誤って「に」を選ぶ誤答率が高かった。それは、距離的に離れていて遠いという意味を表す「あの」等を伴うことによって、誤答率を上げる何らかの効果が高まったからであると思われた。

本研究は、中国語を母語とする中級レベルの学習者を対象として調査を行ったが、今後、韓国語を母語とする学習者、英語を母語とする学習者に対しても調査を行い、学習者の母語にかかわらず、同様の結果が得られるのか、また、母語の違いによって異なる結果がどこに表れるのかを調べることは、中級レベルの学習者の格助詞習得の様子を明らかにするために重要であると考える。このことは、今後の課題とする。

注

1. 蓮池（2004）では、「過剰一般化」を「過剰使用」の一種である（Ellis1994）ととらえ、学習者が特定の助詞を他の助詞より多用する現象を総称する用語として「過剰使用」を用いている。「過剰一般化（overgeneralization）」は、例えば、英語の複数形をつくる形態素-s を mans, mouses のように用いることである（荒木 1999）。
2. 「泊まる」の類は、「存在、状態の表現」と同一することはできないと述べ、‘単なる’「存在の場所」と、移動・変化の結果存在する場所とは区別したほうがよいようだと述べている。
3. 菅井（2000）は、山梨（1994a）が提案した「近接性」「到着性」「密着性」「収斂性」という認知的制約を援用し、空間の「ニ格」が「一体化」という 1 つの軸で一元的に把握されると述べている。空間の「ニ格」が、「近接性（例：針金を内側に曲げる）」、「到着性（例：壁にボールを投げる）」、「密着性（例：壁にペンキを塗る）」、「収斂性（例：調味料をスープに入れる）」という程度差をもって「一体化」する特質があることを示している。
4. 森山（2005）は、「移動の着点」の用法には、人への具体的移動（例：「友達に本をあげる」）、人への抽象的移動（例：「学生に日本語を教える」）、人へのメタファー的移動（例「息子を一人前の大人にする」）、モノへの具体的移動（例：「携帯にストラップをつける」）、モノへの抽象的移動（例：「ゲームボーイにはまる」）、モノへのメタファー的移動（例：「水を氷にする」）、場所への具体的移動（例：「机の上に本を載せる」）、場所への抽象的移動（例：「遠くアメリカに思いを馳せる」）、場所へのメタファー的移動（例：「都を京都にする」）9 通りがあると述べている。
5. 「食堂に食べる」のように「に」を選んだのはなぜかを尋ねた。回答は以下の通りである。最も多かった回答が「食堂に」と言いつつ、曲げていた腕を伸ばして親指を立て、離れている場所を指し、「に」と言ったり、「食堂に」と言ったりして、「行って、食べるから『に』」「食堂に行くの『に』だ」「目的はご飯を食べる。そのために食堂へ行くから『に』だ」というものだった。10 人中 2 人の回答は「目的がご飯を食べることだから」「ご飯を食べるのが目的だから」『に』だというものであった。
6. 文から受けるイメージについては、以下に示す調査票を使って調査した。調査票を配布する前に、調査票をパワーポイントのスライドに示して説明した。「動的」は「動いている感じで、移動がない」こと、「静的」は「動いていなくて、移動もない」こと、「移動先」は「目的・目標へ向かって人や物が移動する感じで、移動がある」ことを表しているとし、それぞれ例となる文を添えている。「動的」「静的」「移動先」に当てはまるイメージがない場合には、「その他」に記述してほしいことを伝えた。

・a と b の文を比べて、どんなイメージがありますか？感じたイメージを「動的」「静的」「移動」から１つ選んで、〇をつけてください。

「動的」は動いている感じ・移動はない（「テニスをする」など）、

「静的」は動いていない感じ・移動はない（「本がある」など）、

「移動先」は目的・目標へ向かって人や物が移動する感じ（「アメリカに行く」など）、

「動的」「静的」「移動先」以外は「その他」にその文に対するイメージを書いてください。

1 a、事務所で仕事をする（動的・静的・移動先・その他　　）

b、事務所で働く（動的・静的・移動先・その他　　）

2a、教室で本を読む（動的・静的・移動先・その他　　）

b、教室で読書する（動的・静的・移動先・その他　　）

他 5 問

7. 中間言語（interlanguage）とは、Slinker（1972）の用語。第 2 言語習得の過渡的段階で、学習者が目標言語を使用して産み出した言語ではあるが、その言語の母語話者が同じ意味を表すのに用いる言語体系とは異なるものをいう（荒木 1999）。

8. 第 2 言語学習者の中間言語は絶えず変化している。しかしながら、学習者は、ある段階を飛び越えて次の段階へ進むことはなく、むしろ目標言語体系に関する新しい仮説に適応するよう中間体系を徐々に修正していく（Ellis1985）と言われている。

9. 大学入学前の日本語学習歴が 1 年以上の学習者を「中級レベル」としている。

10. 学習者の在籍している学部は、経済学部、経営学部、商学部、工学部である。学習者の性別は、女性が 38 人、男性が 50 人で、出身地域は江西省、湖南省、山東省などさまざまで方言も異なる。学習者が本大学入学前に日本語を学習した機関は、10 カ所以上で、日本語学習教材もさまざまである。

11. 調査実施の直前に問(2)の問題文「(あなたは今、九産大の教室です）東京（に、で、を、から）行く。」をパワーポイントのスライドに示し、「みなさんは今この教室です。九産大の教室です。という意味です」と口頭で説明している。口頭による説明の際には、回答のヒントとなり得る「に」を使っていない。

12. 調査票 4 は別の目的のために考えたものであり、調査票 1 ～3 問(2)(3)(4)を採用していない。

13. 蓮池（2004）からすると、動詞が他動詞であるか自動詞であるかによって、「で」正答率が左右されるおそれがある。そのため、学習者 88 人の 1 人 1 人の他動詞文に対する「に」誤答率と、1 人 1 人の自動詞文に対する「に」誤答率に有意差があるかどうかを見るために、t 検定を行ったところ（t(1.519)df=87,p＞.05)、本調査では、動詞が他動詞であるか自動詞であるかの違いによって、「に」

誤答率は、有意差がなかった。このことから、他動詞文と自動詞文の正答率を同じものとみなしてよいとし、両者の正答率を合わせて「動作デ」文の正答率とした。

14.　「動作デ」文に比べて、「動作デ＋あの・東京」文が複雑になっていることを考慮すると、「動作デ＋あの・東京」文の「に」誤答率が「動作デ」文の「に」誤答率を下回ることはないと考えられるので、片側検定が適当なケースといえるかもしれない。その場合、5%の有意水準で有意となる。また、割合の差の検定を用いると、両側検定でも 5%の有意水準で有意である。

15.　表 5 は、「学習効果」の有無を見るために、調査票 1、2、3 の格助詞の正答率を示している。表 4 によると、「で」の正答率は、調査票 1 が 87.02%、調査票 2 が 80.58%、調査票 3 が 82.76%である。学習効果が表れているならば、調査票 1 よりも、調査票 2、3 の正答率の方が高くなるはずである。同様に、「に」の正答率は、調査票 1 が 77.46%、調査票 2 が 79.45%、調査票 3 が 75.0%、「から」の正答率は、調査票 1 が 89.77%、調査票 2 が 88.47%、調査票 3 が 85.71%、「を」の正答率は、調査票 1 が 58.33%、調査票 2 が 62.21%、調査票 3 が 60.13%であった。

表 5　学習効果を見るための調査票 1、2、3 の「で」「に」「から」「を」の正答率

調査票 1

	「動作デ」文の「で」	「に」	「から」	「を」
正答率	87.02	77.46	89.77	58.33

調査票 2

	「あの・来年」文の「で」	「に」	「から」	「を」
正答率	80.58	79.45	88.47	62.21

調査票 3

	「東京」文の「で」	「に」	「から」	「を」
正答率	82.76	75.0	85.71	60.13

n=88

参考文献

新井栄蔵(1972)「『場所』を示す場合の格助詞『に』と『で』をめぐって」『日本語・日本文化』3:43-57.

荒木一雄(1999)『A Dictionary on Technical Terms of English Linguistics』三省堂

伊藤健人 (2008)『ひつじ研究叢書＜言語編＞第 64 巻イメージ・スキーマに基づく格パターン構文―日本語の構文モデルとしてー』ひつじ書房.

大河内康憲(1997)『中国語の諸相』白帝社.

顧海根(1983)「中国人学習者によくみられる誤用例―格助詞、係助詞「も」、接続助詞「て」などを中心に―」『日本語教育』49:105-118.

迫田久美子(2001)「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)－場所を表す「に」と「で」の場合－」『広島大学教育学部日本語教育学講座紀要』17-22.

白畑知彦・若林茂則・村野井仁(2010)『詳説第二言語習得研究―理論から研究法まで―』研究社.

菅井三実(2000)「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』13-24.
杉村博文(2007)『中国語文法教室』大修館書店.
鈴木忍(1978)「文法上の誤用例から何を学ぶか―格助詞を中心にしてー」『日本語教育』34:1-14.
高橋太郎(1994)『動詞の研究動詞の動詞らしさの発展と消滅』むぎ書房.
高見澤孟・ハント蔭山裕子・池田悠子・伊藤博文・宇佐美まゆみ・西川寿美(2008)『新・はじめての日本語教育Ⅰ』アスク出版.
張麟声(2005)『日本語教育のための誤用分析中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク.
寺村秀夫(1999)『日本語のシンタクスと意味第Ⅰ巻』くろしお出版.
時枝誠記(1975)『日本文法口語篇』岩波書店.
時枝誠記(1979)『日本文法文語篇』岩波書店.
日本語教育学会(1991)『日本語教育事典縮刷版』393-394.
橋本進吉(1979)『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
蓮池いずみ(2004)「場所を示す格助詞『に』の過剰使用に関する一考察－中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析－」『日本語教育』 7: 52-61.
(2012)「日本語の空間表現『に』と『で』の選択にみられる母語の影響－助詞選択テストの結果分析」『言葉と文化』59-76. (www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/13/13-05.pdf)
増田恭子(2001)「第二言語としての日本語学習者の場所格に関するストラテジー使用の変化」『2001 年度日本語教育学会春季大会予稿集』55-60.
松下大三郎(1984)『改撰標準日本文法』勉誠社.
水野義道(1987)「場所を示す中国語の介詞＜在＞と日本語の格助詞『ニ』『デ』」『日本語教育』62:105-117.
籾山洋介(2010)『認知言語学入門』研究社.
森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院.
森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
森山新(2005)「認知言語的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程平成14～16 年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)(2)」研究成果報告書課題番号 14510615.
山内博之 (2004)「語彙習得研究の方法―茶筅とNグラム統計―」『第二言語としての日本語の習得研究』7：141-161.
山田孝雄(1936)『日本文法學概論』寶文館.
山梨正明(2009)『認知構文論―文法のゲシュタルト性―』大修館書店.
米川和雄・山崎貞政(2010)『超初心者向け SPSS 統計解析マニュアル』北大路書房.
刘月華・潘文娱・故韡・相原茂監訳(1988)『現代中国語文法総覧（上)』くろしお出版.
Braidi, S.M.(1999)*The acquisition of second-language syntax*. London: Arnold.
Ellis, R. (1985) *Understanding second language acquisition*. Oxford University Press.（牧野高吉訳(1995)『第2 言語習得の基礎』ニューカレントインターナショナル）.
(1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.（金子朝子訳(2003)『第二

言語習得序説』研究社）.

(2008) *The study of second language acquisition (2nd ed.)*. Oxford University Press.

Hoel, P, G. (1976) *Elementary Statistics 4th Edition.* John Wiley & Sons, Inc.（浅井昇・村上正康訳(2006)『初等統計学原書第 4 版』培風館) .

Larsen-Freeman, D. and Long, M, H.(1991) *An introduction to second language acquisition research*. London: Longman.

Lightbown, P. and Spada, N.(2006) *How languages are learned(3rd ed.)*. Oxford University Press.

Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics.* Vol3X/3:209-231.

Seliger, H, W. and Shohamy, E. (1989) *Second language research methods*. Oxford University Press.

Towell, R. and Hawkins, R. (1994) *Approaches to second language acquisition*. Clevedon. UK: Multilingual Matters.

Confusion between the goal Casemaker ‘ni’ and the active Casemaker ‘de’

Miho Okada・Minoru Hayashida（Kitakyushu University）

Abstract

Second language learners of Japanese tend to use ‘ni’ instead of ‘de’ as an error (“Shokudou ni gohan o taberu.”, “Ano kissaten ni kohii o nomu.”). The purpose of this study is to clarify when learners confuse “ni” with the active case maker “de”. The results showed confusion between the goal case maker “ni” and the active case marker “de” were observed. Moreover, we compared the sentence “Shokudou de gohan o taberu.” with “Ano shokudou de gohan o taberu.”and the results showed significant difference of the error rate. We thought the errors were caused by “ano”. The result is that the errors rate of the sentences with “ano” was higher than the sentences without “ano”.

keywords: the goal case maker ‘ni’, ‘ano’ and ‘rainen’, he active case marker ‘de’